

書籍タイトルからみた「情報リテラシー」に対する世間の認識

筑波大学大学院 中園 長新

要旨 情報教育で使われる用語には、定義が不明確なものや、正しい定義と世間の認識が乖離しているものが多く見受けられる。今回はそれらの中から「情報リテラシー」という用語に着目し、市販されている書籍タイトルと内容を分析することで、「情報リテラシー」という用語が世間でどのように認識されているのかを明らかにした。情報や情報教育が正しく認識され浸透していくためには、こうした用語に対する認識を把握し、正しい認識を普及させるよう努めることが重要であると考えられる。

1. 研究の背景と目的

情報教育において使用される用語の中には、その定義が不明確なものや、正しい定義と世間の認識が乖離しているものも多く見受けられる。複数の語句が同義で用いられることもあれば、単一の語句が多義的に用いられることもある。「情報教育とは何か」を明確にするためには、こうした語句の定義を整理し、情報教育を取り巻く理念を明らかにする必要があると考えられる。

本研究では情報教育に関わる語句の中から、最も基本的なもののひとつと考えられる「情報リテラシー」に着目した。「情報リテラシー」は書籍タイトルとしても多用される用語であり、そのような形で人々の目に触れることも多い。そのため今回は書籍タイトルという媒体に限定した上で、「情報リテラシー」という語句を世間がどのように認識しているのか調査した。

2. 情報リテラシーの定義

書籍タイトルの分析に入る前に、「情報リテラシー」という語句の定義について、文部科学省によるものを中心にいくつか確認する。

2.1 文部科学省による定義 1

情報教育分野における「情報リテラシー」の定義で最も有名なものは、1986年の臨時教育審議会第二次答申^①によるものであろう。そこでは「情報リテラシー」を「情報活用能力」と同義であると位置づけ、「情報および情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」とであると定義している。この定義は現在も支持されていると考えられ、文部科学省の情報活用能力の三観点である「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の基盤になっていると考えられる。

2.2 文部科学省による定義 2

前節で文部科学省による定義を示したが、この

定義は省内すべての部分で統一されているわけではないようである。たとえば文部科学省が毎年実施している「学術情報基盤実態調査」では、語句解説^②において「情報リテラシー」を「コンピュータやネットワークの基礎的な理解、コンピュータやソフトウェアの操作、情報検索能力等を指す」と明記しており、ここでは前節と異なり、コンピュータに関する内容が強調されていることが見て取れる。

2.3 図書館情報学における定義

参考までに、教育学以外での「情報リテラシー」の定義にも触れておく。図書館情報学では図書館でのサービス等に関連して「情報リテラシー」の語句を用いることがあるが、藤田(2011)はこれを「自分がどんな情報を求めているのかを理解し、その情報を的確に探すことができ、その内容を評価し判断して、行動したり、自分から情報を発信するといった、情報を利用できる能力」と定義している^③。情報の活用全般を網羅している点で、藤田による定義は2.1節での定義に近いものがあると考えられる。

3. 調査と結果

本章では、書籍タイトルにおいて「情報リテラシー」という語句がどのような意味で用いられているかを調査によって明らかにし、その結果から「情報リテラシー」という語句に対する世間の認識を明らかにする。

われわれは様々なメディアから情報を収集しているが、コンピュータ全盛の現代においても、その中において書籍の占める割合も少なくないと考えられる。一般的には書店等で本のタイトルを眺め見(ブラウジング)し、興味を持ったタイトルがあれば手に取る、という情報行動が多く行われているであろう。そのような行動においては、書籍タイトルがわれわれの第一印象を形成していく。そのため、書籍タイトルの傾向を調査することは、

われわれの認識を間接的に調査する上で有効であると考えられる。

3.1 調査方法

本調査では、国内で発行されている書籍のデータベースとしてオンライン書店 Amazon.co.jp を用いた。Amazon.co.jp のデータベースで検索対象を「和書」に絞り、詳細検索機能で書名（タイトル）「情報リテラシー」を検索し、ヒットした書名のリストを作成した。調査は2012年7月10日に実施し、ヒット数は227件であった。

3.2 調査結果と分析

ヒットしたタイトルのうち、「情報リテラシー入門」等のように、タイトルからでは情報リテラシーのとらえ方がうかがえないものが102件（44.9%）あった。本調査ではこの102件を除外し、タイトルから傾向が推察される125件（55.1%）を分析対象とした。分析対象書籍125件の内容をタイトルに含まれる単語から推測したところ、表1のように6種類に区分できた。「〇〇情報リテラシー」とは、「医療情報リテラシー」等のように特定分野に限定した情報リテラシーを表している。

表1 区分ごとのタイトル該当件数

区分	件数	割合
調査・研究法	6	4.8%
コンピュータ活用	74	59.2%
「〇〇情報リテラシー」	4	3.2%
図書館・教育	9	7.2%
資格試験対策	25	20.0%
金融・経済	7	5.6%

表1より、「情報リテラシー」をタイトルに含む書籍は、コンピュータ活用に関したものが約6割を占めていることが分かる。この区分に該当するタイトルには「Word」「Excel」「Windows」等が含まれているものが多く、コンピュータスキルの習得が情報リテラシーであると認識されているのではないかと推察される。また、資格試験対策問題集も2割ほど見られたが、これらが対象としている試験もパソコンスキルに関するものが多く、広義ではコンピュータ活用を意識していると考えられる。これらの結果から、タイトルからテーマが推測できる書籍のうち、約8割が何らかの形でコンピュータ活用に主眼を置いていることが明らかになった。

4. 考察

本研究の調査から、市販されている多くの書籍において、「情報リテラシー」というタイトルがコンピュータ活用に関するものとして扱われていることが確認された。特に Windows や Word, Excel といった特定のアプリケーション名を冠したタイトルが多く、コンピュータの活用スキル（場合によっては特定アプリケーションに特化したスキル）さえ習得できれば「情報リテラシー」が身につくと誤解されることにも繋がりがかねない。「情報リテラシー」に対するこのような認識は、1章で確認した定義とも乖離している。情報教育等の分野における「情報リテラシー」と、世間が認識する「情報リテラシー」の乖離は、情報教育が世間に正しく認識されることを妨げているのではないかと推察される。

5. 今後の課題

今回の調査は書籍タイトルだけの調査に留まっているが、3.2節で確認したように、調査対象のうち44.9%の書籍についてはタイトルからテーマを推測できなかった。今後は書籍の内容も調査対象として、各書籍のテーマを厳密に判定し、部テーマ区分ごとの割合を算出・分析する必要がある。

また、そもそも「情報リテラシー」という用語の「正しい」定義は何であるのか、という根本的な問いにも向き合う必要があるだろう。2章で確認したとおり、文部科学省内の文書に限定してもその定義は一樣ではなく、ブレが見られる。学術的観点から用語を適切に定義することも研究の視野に含める必要があると考えられる。

さらに、本研究成果を他の語句調査に援用し、情報教育を取り巻く様々な語句の認識について整理することが必要であろう。今後の体系的な調査が求められる。

引用・参考文献

- (1) 臨時教育審議会「教育改革に関する第二次答申」（1986）（臨時教育審議会『教育改革に関する答申：臨時教育審議会第一次～第四次（最終）答申』pp. 35-160（1988））
- (2) 文部科学省「学術情報基盤実態調査（旧大学図書館実態調査）用語の解説」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/yougo/1266773.htm
（2012-07-10 確認）
- (3) 藤田節子『図書館活用術 新訂第3版：情報リテラシーを身につけるために』日外アソシエーツ（2011）